

<特集随想>外間先生の横顔(一九七七～一九八六)

著者	波照間 永吉
雑誌名	日本文学誌要
巻	51
ページ	122-124
発行年	1995-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019811

う。

もう一つ、私がゼミ合宿で忘れられないことといえば、昨年、琉球舞踊鑑賞の折に先生がカチャーシーを踊られたこと。そして、その踊りがお上手だったこと。

外間先生の横顔（一九七七～一九八六）

さすが「外間先生」と思った。先生は、かつて東京都の国体メンバーの野球選手であり、また、空手八段のスポーツマンでいらっしやる。私が先生にカチャーシーもお教えいただきたいと言ったら先生は何とおっしゃるだろうか。（さきやま たもつ・大学院修士課程二年）

波照間 永吉

先生との出会いは、たしか一九七五年の秋頃のことと思う。当時琉球大学の研究生をしながら、進路についてなお思い悩む日々の続いていたところである。たしか、新里幸昭さんに紹介されて琉球大学の方言研究クラブの部室でお会いしたと思う。勿論先生のお名前はその前から存じ上げていたし、その何年か前には、外間先生の伝言を携えた竹内重雄さんとも会っていたから、初めてお目にかかることではあったが、それほど緊張していた記憶はない。そのとき何をお話したかは今はもう定かではないが、多分、八方塞がりの状態にあった僕の進学問題について、お聞きいただいたように思う。何故なら、その後すぐに東京の先生から、励ましのお手紙を頂いているからである。その手紙には「君に進学する気持ちがあるのであれば、自分は幾らでも応援の手をさしのべられます」という趣旨の言葉が記されていた。この手

紙を貰って僕の道は決まった、といっても過言ではないと思う。その翌年一年をかけて、僅かではあったが東京生活の資をつくり、一九七七年三月末、上京ということになった。

一九七七年当時、外間先生の研究室には竹内重雄さん、田畑千秋・中村博子さんが在籍し、都立大学大学院から多和田真一郎さん、学習院大学から荒川さち子さんらがゼミに加わって、活発に議論を展開していた。そこに、西表宏、大城學君と僕とが聴講生として参加するようになったのである。

その頃は皆がまだ青年であつたから、時折沖縄出身の大学生たちと野球の試合をすることもあった。先生の「戦歴」をまだ伺ってもしなかった僕は、あまり期待するでもなしに、そのことをお伝えした。ところが、なんと先生は羽根木公園球場に着くや、ユニホーム姿に変身

したのである。先生はあのミスター・長島と同じく三塁手四番打者という大役を実に見事にこなし、僕の予想を大きく「裏切った」のであった。先生もまだ五〇を少し越えられたところで、当然、若々しくあられた。しかし、それは若さ故のことだけではなかった。キャッチングもスローイングもミスターばりに華麗であり、バッティングの正確さもフォームも実に見事だったのである。学者として実にめざましい成果をあげながら、なぜ野球までこんなに上手なのだろう、と驚いたのは言うまでもない。その後、先生ご自身からスポーツマンとしての「戦歴」をお聞きするにおよんで、最初の野球場での驚きが、納得へと変わっていった。そしてもう一つ、研究がどんなに忙しくても、体を動かすことに喜びを感じられる人柄にいつべんで親しみをおぼえたものである。

ところで、大学院での先生は、こわい存在であった。ゼミは『おもしろさうし』を中心とした沖縄の文芸についての講義と演習であったが、『校本おもしろさうし』『おもしろさうし辞典・総索引』、そして岩波本『おもしろさうし』の編著者としてのすごさ・重みがひしひしと感じられる時間の連続であった。沖縄で仲宗根政善先生のお宅で毎週もたれていた「おもしろ研究会」で勉強してきてはいたのだが、院生同士で議論をし、先生のお考えをうかがうにつけ、自分の不勉強を思い知らされる毎日であった。オモロ語ひとつの説明にも正確さを求められ、自分の考えていることを伝える、ということのために、ことばを選びつつ話すことをしつけられた。その度に、あの緻密で精確な『おもしろさうし辞典・総索引』を営々とした努力でなし遂げられた学問の深さが、思われるのであった。

また先生の指導は、レジュメの文字にまで及んだ。誤字・脱字の指

摘はいうまでもなく、僕の変に癖のある字のひとつひとつまで注意して下さるのである。今もその指摘を受けた文字を書く時には、その時の先生の声が思い起こされる。

当時、先生は『南島歌謡大成』全五巻の編集・刊行という大事業の真っ最中であつた。僕は西表・大城両君とともに八重山篇の手伝いをさせてもらったが、その中でどれだけ多くのものを学んだことだろう。校正のレベルの作業についても沢山のことを学んだが、もっと本質的な、資料集・テキストをつくることの意義とその作業に求められる精確さについて生きた勉強をさせてもらっていたのである。これは、図書館に並んだ本を百遍繰ってもおそらく感得できないもののように思う。

先生は当初国語学的研究から手がけられたのであるが、その一翼を担う方言研究の方法を沖縄の古代文学の研究にも応用された。その顕著な例が、理論的場面における「原日本文学」の構想であると思われるが、もう一つは方法としてのフィールドワークの重視である。先生以前の沖縄の古代文学研究は、文献中心であつたといつても過言ではない。そこに宮古諸島の歌謡調査に代表されるフィールドワークによる新しい研究が提示されたのである。フィールドワークが拡大されることによって、「沖縄文学の展望」が可能となってきたのであるが、先生はフィールドワークの重要性を常に説かれた。そして、僕たちにフィールドワーク実践の場まで準備してくれたのである。それが沖縄文化研究所の沖縄久米島の総合調査であつた。

久米島調査で大学院のメンバーは概略、フィールドワーク班と文献調査班に分かれて仕事をしたように思う。前者は久米島の御嶽や民俗遺跡を実地に踏査し、その概況を記録した（これはその後僕自身が手

を染めるようになる、沖縄の御嶽研究の最初の仕事であった)。こうして、島在住の研究者仲村昌尚さんに案内されて久米島中を駆けめぐり(ある時には一日に三回もハブと遭遇するということもあった)、島尻克美君らと久米島古文書の講読会を組織して久米島という一地域の文化を学んでいくようになった。このように先生は、僕たちにフィールドの経験を積ませ、デスクワークとフィールドワークを研究の両輪とする方法を学ぶようにしむけられたのだと思うのである。

先生は常日頃から「もと真面目の外間守善」と話される。そして「文部省推薦・期待される人間像の波照間」と僕をからかわれるのだが、僕からすると「もと真面目」ではなく「今なお現役真面目の外間先生」である。しかし、である。「現役真面目」の先生は相当なテーフア(冗談好き)でもある、というのが僕の観測である。そのことを知ったのは、先にふれた久米島調査の報告書の校正中のことである。夏休みのある日、うだるような暑さのなか沖文研で先生と編集者の朝比奈時子さんの三人であの大部の本の校正をしていたのであるが、S君から送られたゲラと悪戦苦闘している僕の仕事をのぞいた先生は、隣の机でなにやらしたためていた。なにをしておられるのだろうと思っているところに、S君に宛てた手紙だといって一つの文章を手渡していかれた。その文章には、朱にあふれたS君のゲラに対する批評——それは多分にその場の空気を和らげるための演出であったのだが——が、ユーモアたっぷりに記されていた。その一節には「朱色の溢れた、縦横無尽な校正、実にお見事なお手前でございます云々」とあったことを覚えていた。校正箇所の抜き出し線がそれこそ幾重にもクロスして、最悪な状態を現出していたゲラに対し、「縦横無尽なお手前」と形容してみせたところに、先生のユーモアを感じ、大いに笑いを誘われたこ

とであった。こんなにヒーヒーいながら仕事をしているのによくもこんなテーフアができるものだ、とびつくりするやら、あきれるやらで、S君のゲラとの格闘をしばし忘れたほどであった。

先生のこのようなユーモア感覚のよってくるところを考えてみたいと思うのだが、まだうまく解けないでいる。ただ何となく、先生のようなユーモアの背景には、大抵のことには動じ驚かない、不敵な強さがあるように感じられる。その不敵な強さが生来のものであるのか、どうかは分からないが、あの過酷な沖縄戦を戦い、生き残ったことがどこかで影響しているように思われてならない。

沖縄戦のことをあまり語ることはない先生である。それだけに、あの戦争がどれほど先生の精神に大きな影を落としているか、計り知れないものがあるものと思っている。法政大学の最終講義で、「日本国憲法第九条を守っていただきたい」と話された、ということを聞いて、先生の心の底にあるものがあらためてしのばれる。

今、先生は積年の夢であった『沖縄古語大辞典』の完成にむけて力を注がれている。僕も外間ゼミの先輩方と一緒にその仕事のお手伝いをさせてもらっている。「沖縄学の父・伊波普猷」が『琉球語大辞典』を構想してなお果たせなかった仕事である。沖縄文化研究の金字塔であるこの辞典の作成に関わることできた喜びを感じつつ、最後の作業に取り組んでいる。先生との出会いが無ければこの幸運に巡り合うことはなかった筈である。先生の教育の方法の一つである「仕事の中から学ぶ」のお考えのとおおり、この仕事の中でもまた僕は沢山のことを学んだ。今後ともこの精神をしっかりと受け止め、新しい研究の地平を開いて行きたいと思っている。

(はてるま えいきち・沖縄県立芸術大学附属研究所教授)